慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
決 慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

# 解体中の６号棟に感謝の気持ちをこめて

## アーカイヴ作成

新病院棟建築計画の一環として本年11月より6号棟解体作業が始まった（写真1）。

慶應義塾大学病院6号棟は1953年（昭和28年）に竣工され、これまで臨床各科の病床として利用されてきた。竣工当時は信濃町駅前に商店があり、路面電車が走っていたことが当時の写真からわかる（写真2）。写真中央左手奥に見える白い建物が現在解体工事中の6号棟である。

今回の解体工事を前に、大学病院新病院棟開設準備室と慶應義塾アートセンターが協力し、6号棟内外の写真を撮影し慶應義塾のアーカイヴとして保存するプロジェクトを進めている。アートセンターではユニヴァーシティ・ミュージアム構想の一環として、義塾所蔵の建築物を含む文化財や特定のアーティストに関するアーカイヴを構築する活動を行っている。

60年間に渡り患者さんの療養と教職員や学生の活動を支えてきた建物の温もりを感じられるアーカイヴ作品が出来上がった（写真3）。

写真1

写真２　1960年前後の信濃町駅側からみた慶應義塾大学病院（『写真集 慶應義塾150年』より）

写真３　慶應義塾アートセンター　新良太氏による「慶應義塾の建築プロジェクト」より

# JST「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」

# 慶應医学より４拠点が採択

■拠点A
**iPS細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療**
生理学　**岡野　栄之**（62回）
整形外科　**中村　雅也**（66回）

■拠点B
**培養腸上皮幹細胞を用いた炎症性腸疾患に対する粘膜再生治療の開発拠点**
東京医科歯科大学　**渡辺　守**

「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」は、国際競争が激化しているiPS細胞等を使った再生医療について、我が国のアドバンテージを活かし、世界に先駆けて臨床応用をするべく研究開発を加速するために、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が行う再生医療実現拠点ネットワーク事業の一環です。

具体的には、iPS細胞研究中核拠点（京都大学iPS細胞研究所）で臨床応用を見据えた安全性・標準化に関する研究、再生医療用iPS細胞ストックの構築を実施し、疾患・組織別実用化研究拠点（拠点A、B）では疾患・組織別に責任を持って再生医療の実現を目指す研究体制を構築します。また、技術開発個別課題はこれらの拠点と連携して iPS細胞等の臨床応用の幅を広げる技術開発や、より高度な再生医療を目指した技術開発、iPS細胞等の産業応用を目指した技術開発を行います。本学では我々が拠点Aに、北川雄光教授が「幹細胞パッケージングを用いた臓器再生技術と新規移植医療の開発」、洪実教授が「多能性幹細胞から多種類の分化細胞を、最短時間、高効率、高品質、大量、自在に生産するための基盤技術開発と産業化応用」で技術開発個別課題に採択されました。

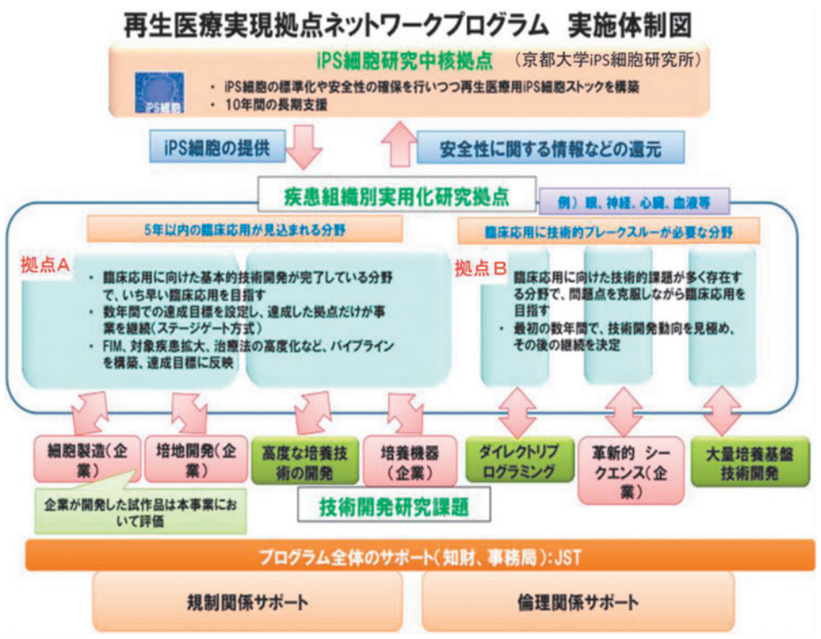
生理学教室と整形外科学教室では、基礎と臨床一体型研究を10年以上にわたり継続し、神経幹細胞、iPS細胞を含む幹細胞研究や中枢神経系における再生医学に関する研究成果を蓄積し、免疫不全マウスや霊長類コモンマーモセットを用いた幹細胞移植系や前臨床研究といった再生医療研究としてのin vivo実験、医学の研究システムを確立し、中枢神経系の幹細胞治療開発の研究領域において世界をリードしてきました。このことが評価されて、本研究チームが「基本的な技術開発が完了し5年以内の臨床応用を目指す拠点（拠点A）」に、課題名「iPS細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療」で採択されました。

本プロジェクトは最長10年間まで継続できますが、ステージゲート方式で実施されるため、各ステージで明確な達成目標が設定されています。ステージⅠ（平成25～28年度）では、臨床グレードの「再生医療用iPS細胞由来神経前駆細胞ストック」の構築を行い、安全性・有効性に関する検証と臨床プロトコールの作成と「ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針」に基づく臨床研究申請準備を進め、4年以内に「再生医療用iPS細胞由来神経前駆細胞ストック」を用いた脊髄損傷（亜急性期）に対する臨床研究の開始（First in Human）することが達成目標に設定されています。この目標を達成しなければ、その後のプロジェクトは中断することになります。またステージⅡ（平成29～31年度）では、慢性期脊髄損傷（不完全麻痺）及び亜急性期脳梗塞に対する臨床研究の開始、さらにステージⅢ（平成32～34年度）では、慢性期脊髄損傷（完全麻痺）および慢性期脳梗塞に対する臨床研究を開始することを達成目標に設定しています。これらの目標を達成するために、基礎研究と前臨床研究を同時に進めて行く必要があり、将来的には治験実施・承認への道筋をつけることも計画しています。

これらのMiles stoneを達成し、これまで有効な治療法がなかった脊髄損傷や脳梗塞に対する再生医療を我が国発のiPS細胞技術により実現できれば、これらの病に苦しむ多くの患者さんたちに一条の希望の光を投げかけられるものと確信しています。慶應医学の柱の一つである基礎と臨床一体型のtranslational researchはまさに正念場に来ていると言えます。

**三四会が拠点リーダーを務める４拠点**

| 拠点 | 課題名 | 拠点リーダー |
|---|---|---|
| 拠点A | ｉＰＳ細胞由来神経前駆細胞を用いた脊髄損傷・脳梗塞の再生医療 | 慶應義塾大学　岡野栄之 |
| 拠点B | 培養腸上皮幹細胞を用いた炎症性腸疾患に対する粘膜再生治療の開発拠点 | 東京医科歯科大学　渡辺　守 |
| 技術開発個別課題 | 幹細胞パッケージングを用いた臓器再生技術と新規移植医療の開発 | 慶應義塾大学　北川雄光 |
| 技術開発個別課題 | 多能性幹細胞から多種類の分化細胞を、最短時間、高効率、高品質、大量、自在に生産するための基盤技術開発と産業化応用 | 慶應義塾大学　洪　実 |




【他3拠点については3面にて掲載】

# 第18回慶應医学賞授賞式・受賞記念講演会開催

慶應医学賞は1996年から始まった慶應義塾医学振興基金の主要事業の1つである。過去には本賞受賞者からノーベル賞受賞者を6名輩出しており、国内外からの注目は大きい。

11月27日、第18回慶應医学賞受賞者であるビクター R. アンブロス博士（米国マサチューセッツ州立大学メディカルスクール分子医学教授）、長田重一博士（京都大学大学院医学研究科医化学教授）を信濃町キャンパスに迎え、慶應医学賞授賞式および受賞記念講演会、記念レセプションが開催された。

医学部管弦楽団の演奏の中、佐谷秀行教授の司会進行により開会された授賞式は、岡野栄之審査委員長による審査報告と受賞者紹介から始まった。アンブロス博士は「microRNAの発見とその作用機構に関する研究」によって、長田博士は「細胞死の分子機構・生理作用の研究」によって、学内外約80名による厳正な審査を経て選出された。

続いて清家篤塾長から、両博士に賞状とメダル、目録が授与された。清家塾長は両博士の功績を称え祝福し、この賞の意義について「これを受賞する人の名誉であると同時に、慶應義塾にとっても大変名誉である」と語った。

また、来賓として西川京子文部科学副大臣（山中伸一文部科学事務次官による代読）、スティーブ・ダイオカス駐日アメリカ大使館経済部科学技術・環境・医療課長より祝辞が述べられた。

続いて受賞者からの挨拶でアンブロス博士は、今回の来日で多くの方々と知り合えたことを機会に、今後のさらなる研究協力へと、義塾とマサチューセッツ州立大学をつなげていきたいと述べた。また、この受賞での来日により、ご令室と3人のご子息とともに久しぶりの家族旅行を叶えられたことの喜びも語った。

長田博士は、今回の授賞は沢山の仲間と行ってきた仕事であり彼らと共に喜びたいと、先輩や同僚をはじめ、世界中の人からの協力への感謝を述べた。また、〝サイエンスは決して底の浅いものではなく深いものである。単純な好奇心からの研究が、何十年という月日を経て大きな仕事につながっていく〟と、基礎研究の継続の大切さ、またそのために不可欠であるサポートへの感謝と重要性を述べ、自身の受賞が若手研究者の励みになることへの願いの言葉で締めくくった。

受賞記念講演会は末松誠医学部長による挨拶から始まり、会場は世界の第一線で活躍される両博士の貴重な講演を聴くため集まった約300名の聴衆で満席となった。各講演後は活発な質疑応答が行われた。

夜には記念レセプションが盛大に行われた。清家塾長、学外審査委員浅島誠理事（独立行政法人日本学術振興会）より祝福の言葉があり、両博士、両ご令室をはじめ、参加者は大いに歓談した。

授賞式後の記念撮影にて

# 第93回慶應医学会総会・シンポジウムを終えて

**泌尿器科学教室　教授　大家　基嗣（66回）**

第93回慶應医学会総会・シンポジウムは「次世代がん治療を探る」をテーマに行いました。がんの罹患および死亡は増加の一途をたどり国民的な問題であります。予防あるいは早期診断によってがんによる死亡を減少させる国家的な取り組みは、成果をあげているとは言えないのが実情です。ところが、治療においては医療を取り巻く技術革新、あるいは分子標的薬に代表される新規の治療薬の開発により、がんの治療成績は向上しつつあります。この癌治療の進歩の現状を把握し、さらなる向上が見込まれる「次世代」のがん治療について、4つのがん治療分野、すなわち、手術、放射線、免疫、薬物治療の現状と展望を4名の各分野の第1人者にご講演を頂きました。

手術治療の大きな柱として、がんの制御を担保しながら低侵襲治療を実現することがあります。竹内裕也先生（慶應義塾大学外科学准教授）は胃がんの治療を中心に、腹腔鏡下手術の様々な工夫と、慶應消化器外科のお家芸とも言えるセンチネルリンパ節のナビゲーションによる「次世代」消化器がん治療を示されました。

がん治療において放射線治療の比重は増加しています。鎌田正先生（放射線医学研究所重粒子医科学センター長）は2003年から先進医療として開始した重粒子線治療治療が7000例を超えたこと、前立腺癌を代表とするがんの根治治療の他、手術困難な骨軟部肉腫、直腸がんの術後の局所再発など、適応疾患は拡大していること、全国的に装置が普及しつつある現況をお話されました。

抗CTLA抗体あるいは抗PD―1抗体の出現により、俄に免疫治療が着目されつつあります。河上裕先生（慶應義塾大学先端医科学研究所長）は宿主免疫機構を介する機序のため、効果の持続が長いことが特徴であり、生存期間の延長に寄与していること、今後はがんワクチンによるアジュバント治療、進行がんでの効果を予測するバイオマーカーの同定が課題であることを述べられました。

大津敦先生（国立がんセンター東病院早期・探索臨床研究センター長）からは、がん領域の新薬開発拠点としての基盤整備についてご講演いただきました。国立がんセンターを横断的に整備し、さらに、新薬開発・臨床試験に重要な部門を創設することで、現在では、100を超える全国の大学、研究機関と連携しながら、着実に基盤整備されている現状をお話頂きました。

会場からも活発な質問とご討議を頂戴し、がん治療に対する関心の深さを感じました。塾の一員としてビジョンと自信を持ちつつ着実に前進すべき使命感を感じるシンポジウムであり、成功裏に終了したことをご報告申し上げます。来年度も皆様のご参加をよろしくお願い申し上げます。

国立がんセンターの大津先生による講演

モデレーターを務めた大家

# 全国私立医科大学同窓会連絡会第24回全国会報告

**理事（ワークライフ支援担当）　佐藤　美奈子（65回）**

平成25年11月30日（土）、17時30分よりザ・リッツ・カールトン大阪において、近畿大学医学部同窓会幹事で開催された。全国に29ある私立医科大学同窓会のすべてから123名が参集し、本会からは昨年、同連絡会第23回会頭を務めた吉野肇一評議員会議長、池田美智子理事、近藤太郎理事、佐藤美奈子の計4名が参加した。

総会は、米井潔　近畿大学医学部同窓会長の挨拶の後、近畿大学前理事長の世耕弘成　内閣官房副長官の挨拶に引き続き、直近の東部会については幹事の日大医学部同窓会から、西部会については大阪医大同窓会からそれぞれ報告があった。昨年度全国会幹事の三四会からは、吉野評議員会議長よりそのときのお礼、爾来、継続審議であった全国会会則変更の今回承認に対する原案上程者としての謝意が述べられたのち、全国会として初の社会発信事業である「私立医科大学病院内保育所の経営に対する公的補助拡充の要望」に関して、その後の活動が報告された。すなわち、政界、医師会、マスコミ等へ陳情、『日本医事新報』オピニオン欄への投稿結果の別冊が会場で配布された（池田美智子、他：日本医事新報4669,14-17,2013）。

今回全国会のアンケート調査は「研修医の母校への定着」がテーマであった。私立医科大学の初期研修医募集は平均50名であるが、母校出身者の採用は約30名にしか至らず、将来の医師不足が懸念されている。改善策として、同窓会が大学と協力し「母校愛」を育むために行っている対策についての報告と、さらなる改善のための討議が行われた。

総会後、会場を移動して懇親会が行われた。会長挨拶に引き続き、塩崎均　近畿大学長の挨拶、楠進　同医学部長の乾杯の後、近畿大学のおもてなし、「近大マグロ」が振る舞われた。これは同大学水産研究所で世界初の完全養殖に成功したというブランドものである。羽生田たかし参議院議員（東京医大卒）からの祝辞に引き続き、懇親会のメインである、各大学からのスピーチがあった。慶應は、「母校愛」について、他学部と合同で行う連合三田会大会があり、三四会も参加していること、比企能樹　三四会長が連合三田会会長に就任したこと、また、医学部100年に向けた新病院建設事業が始まり、三四会も精力を傾けていることを報告した。

多くの参加者は、懇親会後も二次会・三次会とさらに熱く語りあい、私立医大卒という同じ境遇同志の懇親を深めた。

## 慶應義塾大学病院　年末年始の休診

年末年始は、12月30日（月）より1月4日（土）の間休診と致します。
また、12月29日（日）と1月5日（日）は日曜日のため休診となります。

病院長

## 「医学部新年祝賀式」および「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」の開催について（ご案内）

医学部長　末松　誠

医学部では毎年新春に教職員および三四会員による祝賀式を催しておりますが、この度、新年祝賀式を下記により開催することにいたしました。新春早々ご多用のことと存じますが、ご都合をお繰り合わせのうえ、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

なお、本祝賀式と併せ「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式」を執り行います。

記

日　時　平成26年1月6日（月）11時から13時30分
場　所　2号館11階　大会議室

## 鑑賞来

本塾医学部・大学院医学研究科との連携協定締結、連携大学院制度の開始を記念して、当センターの紹介をさせていただきます。

神奈川県立こども医療センターは、1970年（昭和45年）に国内二番目の小児専門病院として、横浜市南区の高台（？）に設立されました（一番目は成育医療研究センターの前身である国立小児病院）。設立当初から、小児病院（現在、12病棟、329床）、肢体不自由児施設（50床）および重症心身障害児施設（40床）の3つからなり、病気や障碍のあるこどもたちに医療と福祉を一体として提供しています。また、敷地内には県立横浜南養護学校が併設され、長期入院、入所患児の教育を行なっています。

当センターには、ファシリティドッグ「ベイリー」が常勤し、看護師経験のあるハンドラーとともに、患児の検査に付き添ったり、歩行訓練を手伝ったりするなど、治療に関わる活動を補助しています。入院療養中のこどもたちのストレスや不安を解消するだけでなく、患者家族にも癒しと楽しみを与えています。

また、ボランティア組織「オレンジクラブ」があり、300人超のボランティアが外来、病棟の手伝いはもとより、読み聞かせ、季節の院内装飾の作業や縫製などの活動を行っています。無償の奉仕を根気強く続けて下さるスタッフの方々には本当に頭が下がります。

当センターは、神奈川県で唯一の小児がん拠点病院（全国で15施設）に認定されているのをはじめ、小児医療のあらゆる分野で専門・高度先進医療を提供しています。臨床治験も盛んで、臨床研究所を中心に新たな治療法の開発等の研究にも取り組んでいます。

現在、三四会会員は4名（科長3名、医長1名）のみですが、今後、連携大学院制度を利用してより多くの若手医師が当センターに学び、将来の小児専門医療を支える人材に育っていくことを願ってやみません。

（神奈川県立こども医療センター内分泌代謝科・医長　宝谷浩二　68回）